

夏の経済教室 東京(中学校向け)記録

第一日目 8月17日(月)朝から豪雨。最寄駅を通る地下鉄東西線が事故で不通になるというアクシデントも加わり、先生方も当初はやや集まりが悪かったが、途中からはほぼ満席になった。

主催者挨拶のあと、定刻通り講義が開始された。

一時間目 栗原久先生「中学教科書で教える経済的な見方や考え方」

内容は、大阪教室での講義を参照。

質疑なし。

二時間目 安藤至大先生「中学教科書で読み解く〈労働〉」

内容は、大阪教室での講義を参照。

質疑なし。

三時間目 授業提案、河原和之先生「地理と経済の融合教材の開発ーカナダと関東地方を中心にー」

1 はじめに

東大阪の中学校で教えてきた。ネタ研の活動を続けている。

今年のこの教室は、名古屋、大阪、東京と三会場目。それぞれの会場で、地元ネタをもとに教材提案をしてきている。

勤めていた東大阪での授業は「寝るな、私語をするな、騒ぐな、エスケープするな」の状況だった。しんどい生徒を相手に、ネタ開発をはじめた。当初はまず、生徒に興味を持たせるために「おもしろければ」ということに力点をおいていたが、今は、教えた基礎知識とネタがドッキングしているようなものの開発している。

2 東京ネタいろいろ

ネタの基本、東海道線の電車の色は？それはなぜ？（これは単純な知識問題）

思考判断が入るネタの例

送迎タクシーは、なぜ割増料金を取られるの？

新幹線内のコーヒーは、外で買うより高い。なぜ？

スカイツリー3,000円、都庁の展望台タダ。スカイツリーはなぜ高い？

生徒のわかりたい・学びたい課題と、教えたことの一一致点を見つける。それが大切である。

「機会費用」の効用として、中国と領土問題などきな臭い話が多いが、「中国が日本と戦争することのメリットとデメリット」を考えさせると、ほとんどデメリットばかりである。

普通列車にグリーン車が関東にはある。なぜ？いくらならゆっくりゆける？（そこから見えざる手、料金は需給で決まることに気付かせる。）

東京の地下鉄の初乗り 160 円。関西は 210 円。その違いはなぜ？
ドーム球場のビールはサントリー、甲子園はアサヒ、後樂園は？
前のオリンピックの年 1964 年に交通渋滞をさけるために急遽つくられたものは？
子どもの側から授業をつくる方法、例えば NHK のアニメ（『団地ともお』）のなかのセリフなどがヒントになる。

2 本論

本論に入る。

この部分は大阪会場のものと同一なので、参照。

ここでの東京ネタ

104、東京でかけるとどこにつながるか？

国際電話のコールセンターは？

千代田区の人口の変化と、夜間に人口がない町は？

このようなネタをいれながら、オムニバス授業を構成する。5 分に一テーマが基本。

東京で一番高いタワーマンションは何階建てか？

ドーナツ化はどう変わったか？

都心に人口が回帰したのは？

このような地元ネタのオムニバス方式は他地域でも有効である。自分で考える、考えさせる素材になる。

3 カナダ教材の紹介（世界）

略

4 びわ湖の教材の紹介（日本）

表紙部分に、ネタを満載した。

この教材で特に紹介したいのは、沖島のケース。

人口 350 人の島に多額の予算が投資されている。それははたしていいか。

効率と公平の観点から考えさせる。

もし市長になったら、効率と公正の観点から、沖島にどんな政策提案をするか？

（会場の先生にグループで考えてもらい、発表させる。）

5 最後に

社会科の授業の特色は、誰でも主人公になれるところにある。英数との違いだ。

どんなやんちゃな子、学力が不足している子でも主人公になれる。

そういう問いを見つけて、生徒に投げかける。

その例、

元カレより、ニューカレ、のポスター。どこの国？

AKB メンバーの所得は？それは高いか？

13 歳で結婚、14 歳で出産、まだ（ ）は知らない、（ ）の中は？

この問いでは教室がシーンとなった。

どの子もイキイキできる授業を目指している。

加藤一誠先生のコメント

1 まずは雑談、補足から。

コールセンターの話が出てきたが、NEXCO（高速道路）のコールセンターはどこにあるか？（答え、東京。サービスエリアの問題に即応するため。）

東京の地下鉄が安いのは、JRと競合しているため。初乗りが安い。23区以外に出ると決して安くない。

2 地価の話

びわ湖教材での栗東市と近江八幡市の地価の違いから何がわかるか。

地価は需給で決まるが、その価格は、そこで商売したらいくら利益が上がるかという機会費用の考え方から。それが、都心のホテルのコーヒーはなぜ高いという問題と関連する。

3 社会科における地理と経済

地理の先生、地理の授業でも経済を教えてほしいと思ってこの教材を開発している。

沖島の例は、効率と公正を考えるいい素材。

例えば、沖島への公共渡船。

一家に一艘の自家用船があるのであれば、公共交通機関は不要では？

補助金をだして運用することの意味。

これは水平的な再分配（地域間）であるが、垂直的な再分配（年齢間）にも通じる。

どこまでそれを認めてゆくのか、議論の糸口にしてほしい。

四時間目 篠原総一先生「中学教科書で読み解く＜市場＞」

1 はじめに

来年から使う中学の教科書が変わってきた。これはネットワークの先生方の力もある。しかし、内容は混乱している。それは、古い部分、間違っただけが残っているから。また、変わった、正しく記述されてきた部分も、すべての教科書が一斉にそうになっているわけではない。まだら状態である。

公共料金などの例は、栗原先生の講義の入試問題にもあったように、間違っただけの記述がこれまでだったが、自然独占に関して触れてある教科書もある。しかし、きちんと書いてある教科書と違う本があり、それをどうしたらよいか、今、困惑している。

今後、教科書の比較と修正が必要になると考えている。

2 社会科経済で何を学ぶのか？

経済を学ぶ意味に関しては、原点に戻らなければいけないと感じる。細かいこと、断片に関心が行き過ぎている。おもしろいけれど、全体の中で位置づけられていないものも多い。

私は、経済とは、「分業と交換」の社会の仕組みを理解することだと考えている。これに尽きると思ってもいる。

仕組がどうなっていて、うまくいっているのか、いっていないのか、仕組みの役割やあり方を考える。中学生なりに考えてみると言うのが指導要領に書いてある。その時の判断の基準の基礎が効率と公正である。

この考えをしっかりと書いてある教科書もあるが、多くの教科書は、効率と公正に関しては、申し訳程度に最初に触れるだけのものが多い。効率と公正は、各パーツごとに振り返

ってみる必要があるが、その視点を無視した教科書が多い。

企業に関しても同じ。現在の教科書で企業の仕組みはわかるのか。

現代の分業と交換の仕組みに関しては、いつも出しているこの図（省略）でおおよそはつかめるはずである。

クルマの会社（トヨタなど）をイメージしている。私たちが見える部分は、最後の配給と消費者の部分だけである。しかし、その背後には、素材から組み立てまで膨大な製品とその市場がある。それは見えない。また、それぞれの生産物を作っている人（家計）もいて、そのひとたちが、どうやって所得を得ているのかもこの図から浮かび上がるはず。政府に関しては、ほとんどの仕事は経済活動の条件整備であり、また、取引のルール作りである。この図をもとにして、現代の経済の仕組みの見える化を試みてほしい。

経済の仕組みには見えない部分が多い。また、身近な例を使って説明できないことも多い。なぜ、なぜを追求させて、見える化をしてほしい。

3 教科書の問題

先にも触れたが、現在の教科書では、不十分か、誤解にもとづくものが少なくない。例えば、市場は効率、政府は公正という決めつけをしたり、効率と公正の説明が不十分だったりしている。

市場価格の決まり方と市場の役割を混同しているケースもある。

市場では、買い手は家計、売り手は企業という決めつけをしているものもある。

それらを整理すると、典型的なあやまりは次の四つに整理できる。

ひとつは、市場は効率という部分である。

二番目は、価格の種類である。

三番目は、認可価格の対象は公共財という記述である。

四番目は、市場の競争は効率的だが、企業数が減り、独占や寡占になり、価格の下方硬直性がでて、価格競争が停止する、だから、独占禁止法、公正取引委員会があるという記述がある。価格の下方硬直性などは現在ではほとんど観察されない。それがいまだ教科書から排除できていない。

4 競争価格の決まり方

ここから、競争市場の価格調整メカニズムについて取り上げる。

教科書にある DS 曲線はワルラスの調整過程が扱われているが、それ以外の調整方法はたくさんある。生産量の調整など普通におこなわれている。

DS 曲線に関して言えば、これを教えるよりもっと大事なものがあるはず。これは経済学の分析道具であり、これを知って何かに役立つのだろうか。こんなことは経済の常識であり、特に DS 曲線など教えなくても理解できる。

需要曲線も供給曲線も、教科書は逃げた説明をしている。

需要曲線は、ここまでは払ってもよいという買い手の気持ちを高い順にならべたものと理解するとよい。高ければ買わない、安くなれば買うというのは説明としては不十分。供給曲線も同じである。

供給曲線は、長方形の集まりとして考えるべきで、曲線なのか直線なのかという質問は愚問である。

また、シフト問題では、左右にシフトするのか上下にシフトするのかという質問もある

が、これも物品税のケースをみれば、上下にもシフトすることがわかるはず。

このような価格調整メカニズムは市場メカニズムではなく、市場メカニズムと言うのは、市場の自由な取引に任せておけば、社会全体の限りある生産資源が、市場で決まる相対価格に導かれて、それぞれの産業なり財の生産に効率的にふり分けられてゆくことだ。これは、大学三年生くらいの経済学の知識がないと理解できない内容。ただし、先生方には、メカニズムの内容を直感的でもよいから理解してほしい。

5 価格の決まり方いろいろ

以下、価格の決まり方のいくつか紹介してゆく。

ひとつは、すでに触れたが、独占価格、管理価格の問題である。認可価格の誤解についても触れた。

教科書ではあまり触れていないが、生徒が日常のくらしで気づく価格の決まり方もある。

沢山買うと価格が安くなるケース。買う場所によって価格が違うケース。買う人によって価格が違うケース。固定料金と利用料によって決まるケースなどがそれである。私が中学生だったら、このような事例を出して、教科書の記述でこれをどう説明するか、質問してしまうだろう。

最後に、市場の仕組みの法的な側面について触れて終わりたい。

独占禁止法、PL法、誇大広告の禁止、所有権や財産権の重要性など政府の役割に関しても先にあげた図と照らし合わせて理解しておいてほしい。

第二日目 8月18日(火) 本日はあさから曇り。先生たちがそろそろ新学期準備に入るためなのか、本日の参加者は昨日より少ない。

一時間目 大杉昭英先生「経済学習におけるアクティブラーニングのすすめ」

1 はじめに

ある中学の先生から、「アクティブラーニングと言っても、今まで通りでいいんじゃないの?と知り合いの高校の先生から言われた。どう答えたらいいのか」と言う質問を受けた。

高校の先生の発言は、不十分。今、どんどん変化がおきている。例えば、大学入試が今の中一が受験をするときから変わる。その時の、サンプル問題(京大)をまず紹介する。これは理科の問題だが、この種の知識を活用して、説明する能力が求められているのだ。

2 アクティブラーニングとは

以下は、東京高校と同内容なので、参照してほしい。

- ①中教審の動き
- ②キーコンピテンシーとは
- ③資質・能力を育成するカリキュラム編成の考え方
- ④資質・能力の育成とは
- ⑤知識と能力を育てるアクティブラーニングとは

の五点にわたって解説と、先生方が実際に問いに答える、アクティブラーニングの実際を行った。

3 最後に質問にこたえて

高校の講座で講義の後に質問をいただいた。このチャンスで回答をしておきたい。

1 アクティブラーニングでは時間が必要。その時間をつくると知識がへってしまわないか？

回答：その心配はある。ただし、大事なのは問題の状況において、解決できる概念や理論をもちいて考えさせる、読み取らせることである。知識は無限にあるが、本当に必要な基本的部分は多くないはず。限られた時間を基本的知識部分に集中して、生徒の求められている能力・資質を拡大してほしい。

2 アクティブラーニングの学習をどう評価するのか？

回答：アクティブラーニングは学習活動であり、授業評価の対象ではない。授業評価は、PDCA サイクルのなかの Check であり、活動の評価とは別物。生徒が活動を通して、問題を説明できるようになればよい。そこを評価したい。

3 大学入試にアクティブラーニングをどう生かすか？

回答：これから記述式の問題がでてくる。解決の道筋を表現できるかどうか問われる問題が出題されるはず。出題形式や採点方法などまだこれからの部分が多いが、アクティブラーニングを取り入れた学習が有効になるはず。

質疑

1 資質と能力と言ってもバランスの悪さを感じる。どういう観点から資質を育てるのかももう少し説明が欲しい。

回答：資質（うまれながらのもの）と能力（育てるもの）は一体のものと考えべき。一体のものをコンピテンシーと表現している。これをどう育てるか、中教審でも議論している。

2 入試問題は知識中心にならないか。特に都立高校が導入しようとしているマーク式は逆行だと思うが、どうやってコンピテンシーをはかるのか。

回答：高校入試は大事。アクティブラーニングをやってもそれが評価されなければ子どもはやらなくなる。アイテム・レスポンス・セオリーなど記述式でも採点できる方法が開発されはじめている。現在、小学校から大学まで一貫して記述式で説明できる能力がもためられている。知識中心のマーク型入試に逆行はしないだろう。

二時間目 猪瀬武則先生「資源・環境問題と希少性を考える」

1 猪瀬先生の講義

今日紹介する授業案は、約 20 年前に開発したものである。排出権取引、今は排出量取引になっているが、を巡る授業と限界概念を使って環境問題を考えさせようとするものである。

環境教育を経済学から考えることが大事であると言いつけてきた。しかし、「もったいない」がジレンマをもたらすように、また、地球環境問題のとらえ方に異議がだされているように、この問題は、一筋縄ではいかない要素を持っている。

この時大事なものは、all or nothing の発想ではなく、どこかで手を打つ必要があるという認識である。そのブレークスルーに向けてインセンティブをもちいて誘導する解決策を

求めてゆくような授業構成が求められている。

経済的な観点から環境問題を扱う視点の一つとして、外部不経済のアプローチも用いてきた。それがロールプレイの「元気町の町長」である。外部不経済のとらえ方やその内部化というのは、日常感覚と違うところもあり、一般の先生にはしっくりこないかもしれないが大切な見方だ。

また、限界効用から汚染を理解させることも経済的な観点からの授業構成に有効である。これから、先生方の参加で、その実験をやってみる。

(大小のごみをひろってゆく。最初のグループ、次のグループとだんだん拾う数がすくなくなる。最後の方になるとごみを発見するだけで大変になる、というアクティビティ。写真を参照されたい。)



ごみをひろう参加の先生方

これは限界理論の体験であるが、ここから、汚染からの回復といっても、どこかで手を打たなければいけないことを学ぶ。ただし、水俣病のように回復できない問題にはあてはまらない。

このような費用に対する効果のバランスを学ぶことが環境問題を考える上では大切である。

2) 蒔苗尚文先生(つがる市立柏中学校)の実践紹介

弘前大学の附属中学時代から、猪瀬先生と授業づくりをおこなってきた。

1 どんな入り方をすればよいか

環境問題も含めて、インセンティブを用いて誘導する試みと、合理的意思決定をさせるところみをおこなってきた。

問題を広い視点から捉えさせることも大切である。環境問題では、除去する対策と防止する対策、世界的なもの、地域的なものなど、対策と規模から区分をしながら、焦点化させてゆく必要がある。

2 二つの実践紹介

現任校でおこなっている実践を二つ紹介する。

一つは、汚染問題に課税するかどうかのロールプレイである。地元の工場排水をめぐり5つの立場のセリフを用意して、それを生徒に演じさせる。その際、可能であれば、セリフにプラスαをつけて話すように指導している。また、役割は、保護者の職業と関連させることもさせている。ロールプレイ後、意思決定表を完成させる。

二つ目は、エコライト・シミュレーションである。これは、エコライトの取引を実際に

おこなわせるシミュレーションである。ロールプレイより複雑なので、内容を理解させるのが学校によっては難しいかもしれない。

3 他教科の例やこれからの構想

家庭科でのフードマイレージの学習や総合学習などで地域の環境への取り組みを発見させるような課題を組み合わせて、総合的に環境問題に取り組ませている。

まだ、教材化はできていないが、ヨーロッパの環境問題への取り組みの例を授業にとり入れられないかという構想も持っている。

三時間目 授業実践提案

1) 奥田修一郎先生「そもそもなぜ社会保障制度が必要なの？」

1 はじめに

アイスブレイクから。今の元気は()%? ○○といえば…。例えば。虫と言え…。それぞれ先生方から発言を求めてゆく。

昨日、佐賀県の武雄市にいった。そのこの図書館から本を借りた。なんでそれができるの? これも先生方から回答を聞いた。(民間会社が運営しているから)

先ほどの虫を聞いたのも、年金の話「アリとキリギリス」の話などから、授業のヒントを得てゆくなど、生徒を引き付ける努力を、ネタ研の活動とともに続けてきた。

こんな言葉もある。「授業以前に()割がたすでに勝負は決まっていて、()割が教材研究。あとの()割が教科の学習力の総和と学級集団の仲間意識である」。先生方はこの()にどんな数字を入れるだろうか。

なぜ、こんな話から始めるか。今、大阪の中学校につとめている。授業に行くのはしんどい。だから、教材研究をしてすこしでも良い授業、楽しい授業をしたいと思っているからである。

目指す授業は、学力差のない授業、発問という視点を大切にしておくこと、子ども同士の対話がある授業である。例えば、むかしの『がっちり買いまショール』のように、歴史の中世の授業でコースに分かれて買い物をさせる授業のような試みをしてきている。

授業方法も、ワークショップ型授業を取り入れることが多い。それに一斉授業を組み合わせている。

2 社会保障の授業

社会保障の授業の現実から話したい。

実際にできるのは3時間程度である。そのなかで、制度を学び、将来のことなので生徒は興味を示さないのを引き付ける必要がある。また、教師自身が制度や課題に関して詳しく知らない。

教科書も整理ができておらず、経済で教えるのか、法で教えるのかがはっきりしていない。入試にもあまり出題されないのもモチベーションが低い。

指導要領にはしっかり書いてあるが、教科書は各社ばらばらな扱いが目立つ。評価の方法も難しい。

そんななかのヒントは、社会の仕組みを理解し、それがうまく機能しているのか、していないのか、していないとすれば、どうすればよいかを中学生のレベルで考え方を学ぶと

いう篠原先生の主張にあると思う。それを社会保障制度でみてゆく授業を構想した。

3 授業づくり

授業づくりの視点を整理する。

まず、授業を、知る、わかる・推論する、判断するという三つの探究活動にわけ、それぞれの発問を用意する。

限られた時間なので、重点をおいて公正する。例えば、社会保障とは何？なぜ政府が乗り出してくるか？日本の社会制度にはどんなものがあるの？少子高齢化のなかで年金制度をどうつくる？などがある。そのなかで、探究学習ができる授業展開をこころみる。なぜ？そもそも何？これからどうするの？の問いを大事にしてゆく。

その際、社会保障への経済的アプローチをしっかり持つことが大事。

以下、ワークシートによって説明する。

導入は健康保険から。医療保険の考え方をキリギリス国の、ベーシックプラン、ロングライフプランから選択させる。

その時、アリンコ保険会社ができた時に何がおこり、その会社が倒産したらどうなるかをグループで考えさせる。

そこから社会保障の基本的な考え方を紹介し、日本の制度について調べさせる。

発展学習として、リスクに備えるための政府の役割に進み、公的年金制度の学習に発展する。そのとき、アリとギリギリギリスの話の結末や、入試問題のデータなども取り組ませる。

最後に年金制度の持続可能性、賦課方式と積み立て方式の違いやそれぞれの問題を考察する。また、社会福祉、生活保護の話なども触れる。

ただし、生活保護の問題は学校によっては慎重に扱うべき。ここで生きるのが、子ども同士の対話や学級集団の仲間意識である。

2) 三枝利多先生「社会保障をテーマとした授業実践」

1 はじめに

前半は、社会科とは何を学ぶ教科なのか、という話からはじめたい。

最初の学校は大変な学校だった。それを、授業のおもしろさ、特に導入ネタとクラブ指導による影響力でのりこえた。しかし、何か物足りない、生徒が義理で付き合っている様子を感じて、これではだめだと気付いていった。

2 しくみ学習のとりくみ

授業を変えるきっかけは、しくみ学習である。特に三年の公民科の授業で、授業を改善したことで、入り口の地歴の学習改善に役立って、授業全体が変わってきた。

公民学習、特に、しくみ学習は、篠原先生が主張している、仕組みを理解し、それが機能しているのか、していないのか、していないとすればどうすればよいか、中学生なりに考えるということが大事だと思う。中学生に「なぜ、なぜ」と問うてゆくことが出発点となる。

展開例1として、中学入学時の生徒に書かせている、社会科とは何を学ぶのかのワークシートを提示しておく。

展開例2は、無人島シミュレーションである。これは当初は「分業と交換」の発生の箇

所で扱っていたが、いまは、歴史学習の一番最初に取り組ませている。

3 社会保障の授業

授業案の紹介の前に、二つ話をさせてほしい。

一つは、私の母が先日亡くなった時の体験である。終末期の介護の大変さを体験した。もう一つは、NHK が放映した、岩手県沢内村の歴史のドキュメンタリーである。このドキュメンタリーは、日本の社会保障制度の到達点と現在の問題を鋭くえぐったものである。自身の体験やこの種の資料が授業案を作成するうえでのモチーフとなっている。

社会保障に関する学習指導要領もあげておく。特に、ここからは、社会保障に関して、なぜ市場にすべてまかせておくことができないのか、国や地方公共団体の役割、限られた財源の適切な配分など、授業を作る上でのポイントを示しておいた。

授業プランは、11 時間かけたものを提示しておく。

これは、無人島シミュレーションなどこれまで開発した様々な教材を組み合わせ、その上で、社会保障問題を考えさせる構成にしてある。

中心的な課題は「社会保障充実のために 10%間接税をあげるべき」の意思決定である。

これを、ディベートにするか、ディベート的討論にするか、ロールプレイのパネルディスカッションとするか、三つの案を考えたが、それぞれプラスマイナスがあり、ここでは絞っていない。

4 時間目の「語ろう」のなかで、いろいろ質疑、対話ができるとうまく思う。

四時間目「みんなで語ろうく経済教育を授業でどう活かすか」

参加の先生方を 5 グループにわけ、それぞれ、篠原先生、栗原先生、三枝先生、奥田先生、升野伸子先生（筑波大学附属中）の 5 人の先生がたが順番に各グループに回る方式をとった。

各グループとも、二日間の講義や授業案に関する質疑、自分の実践の紹介、日頃の悩みなどを熱心に話し合った。



グループで話し合う先生方

以上で、二日にわたる中学対象の教室は無事終了した。

記録と文責 新井